

## 説明上のギャップは本当に物理主義にとって無害なものなのか？

金杉武司 (Takeshi Kanasugi)

國學院大學

鈴木貴之氏の著書『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか』は、物理主義（存在論的な自然主義）の立場から意識のハード・プロブレムを解決することを試みたものである。筆者によれば、意識の問題を「ハード」なものにしているのは、意識経験に対しては物理主義の標準的な説明戦略が適用できないように思われるという点である。提題者の理解では、この困難は「説明上のギャップ」の問題として位置づけることができる。そして、この困難に対して本書は、ある形態の意識の表象理論に基づいて、この説明上のギャップが実際には物理主義にとって無害なものであると論じることによって、意識のハード・プロブレムを解決しようとしている。その議論は明晰であり、随所で洞察に富んだ考察を見出すことができる。また、「自然主義的観念論」とも称されるその意識の表象理論は、意識経験に（たとえそれが幻覚であったとしても）事物のさまざまな性質が現れているという直観を肯定している点で非常に独創的なものである（標準的な意識の表象理論はこの直観を否定する）。しかし、この独創性は、果たして「自然主義的観念論」は物理主義なのかという疑問も生むように思われる。本提題では、この疑問を出発点として、説明上のギャップが本当に物理主義にとって無害なものなのかという疑問点について考察することをその中心課題としたい。以下では、これらの疑問点をもう少し詳しく提示する。

筆者は本書の 19 頁において、「物理主義によれば、すべての現象は、単一の理論的枠組のもとで理解できる。そして、ある現象を理解するには、2つの方法がある。その現象がマイクロ物理的な存在者によって構成されていることを示すことと、その現象はある因果的機能を本質とすることを明らかにし、その機能がなんらかのマクロ物理的な存在者によって実現されていることを示すことだ。物理主義の基本的な主張は、原理的にはすべての現象にいずれかの説明を与えることができる、ということだ」と述べている。これは、物理主義にはこの種の「説明」が必要であるという主張に他ならない（提題者には、物理主義のこの定式化は尤もなものであると思われる）。しかし他方で、筆者は本書の 178 頁において、自然主義的観念論の立場を提示する中で次のようにも論じている。「ここで重要なのは、経験される性質は、なんらかの物理的性質に還元されることによって、物理的世界に位置づけられるのではないということだ。物理的性質を持つ事物からなる環境のなかに本来の表象を持つ生物が存在するという、それ自体としては物理主義的に理解可能な事態が成立することによって、物理的性質に還元不可能な性質が、物理的世界の新たな構成要素となるのだ。このような考え方を、自然主義的観念論と呼んでもよいだろう」。この「物理的性質に還元不可能」とは、先に挙げた 19 頁の引用箇所に出てきた「説明」が不可能だということの意味するのだろうか。そうであるとするならば、それは筆者の考える「物理主義」の立場に反する

ことにならないのだろうか。また説明が不可能であるにもかかわらず「物理的世界に位置づけられる」とはどういうことなのだろうか。

もし以上の疑問が妥当なものだとすれば、本書の「自然主義的観念論」は筆者の考える「物理主義」にとって許容できるものではないように思われる。つまり、本書の立場では、意識の問題を「ハード」なものにしている「説明上のギャップ」が埋められないまま残っているように思われるのである。しかしこれに対して、筆者は本書の第7章において、「コウモリにかんする詳細な命題的知識を得ても、われわれがコウモリのように世界を表象できない以上は、コウモリが持つと同様の、世界にかんする非命題的知識を持つことができなくても当然であり、このような世界にかんする非命題的知識と、世界や意識にかんする命題的な知識との非等価性は、物理主義的にも理解可能な無害なギャップだ」という内容の主張を展開しているように思われる。しかし、説明上のギャップの問題にとってのポイントは、「われわれ人間には、コウモリが持つと同様の非命題的知識を持つことができない」ということではないのではないだろうか。それは、筆者の言う通り、われわれが人間である限りにおいては当然のことである。むしろ「仮にわれわれがそのような非命題的知識を持つことができるとしてもなお（その場合、「われわれ」はもはや人間とは言えないだろうが）、なぜこの非命題的知識が得られるのかを物理主義的に説明することができない」ということこそが説明上のギャップの問題のポイントであって、この限りで、第7章の議論は、説明上のギャップの無害化に成功しているとは言えないのではないだろうか。

なお本提題では、以上の疑問点をより詳しく提示した上で時間の余裕がある場合には、さらに、筆者独自の意識の表象理論において本質的な役割を果たしている「本来的表象」についてもいくつかの疑問を提示したい。